

今週の為替相場見通し(2025年9月8日)

総括表		先週の値動き			今週の予想レンジ
		注	レンジ	終値	
米ドル	(円)		146.79 ~ 149.13	147.41	146.00 ~ 151.00
ユーロ	(ドル)		1.1609 ~ 1.1759	1.1722	1.1600 ~ 1.1800
(1ユーロ=)	(円)		172.00 ~ 173.35	172.75	171.00 ~ 174.00
英ポンド	(ドル)		1.3334 ~ 1.3554	1.3507	1.3300 ~ 1.3700
(1英ポンド=)	(円)	*	198.33 ~ 200.27	199.15	196.00 ~ 201.00
豪ドル	(ドル)		0.6483 ~ 0.6588	0.6555	0.6480 ~ 0.6620
(1豪ドル=)	(円)	*	96.06 ~ 97.30	96.65	96.50 ~ 98.00

(データ)先週の値動きに関して、注の欄で無印の項目はみずほ銀行、*印の項目はブルームバーグ。

1. 米ドル

国際為替部 為替営業第二チーム 鈴木 智大

(1)今週の予想レンジ: 146.00 ~ 151.00 円

(2)ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

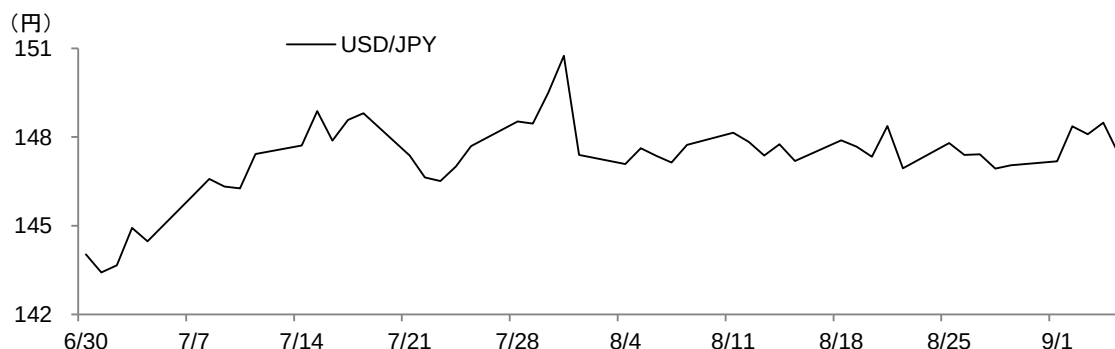
週初1日のドル/円は147.13円でオープン。日本株の軟調な推移などを背景に、一時週間安値となる146.79円まで値を下げる場面があったものの、米国休日で市場参加者も限定的となる中、147円近辺で方向感が出なかった。2日は注目された氷見野日銀副総裁の講演で、市場が期待していたタカ派寄りの内容が示されず円売りが進行。財政規律重視派の森山幹事長が辞意を表明したことや英国の財政拡張懸念に端を発した金利上昇、英ポンドを中心としたドル買いも加わって148円台後半まで値を上げる展開となった。3日は植田日銀総裁が「利上げは予断を持たずに判断する」と発言したことやや下押すも、海外時間入り後に前日と同様英ポンドを中心としたドル買いに149円を超え、一時週間高値となる149.13円まで上昇。ただスターマー英首相の発言や米7月JOLT求人の下振れにより、148円ちょうど近辺まで反落した。4日は複数の米経済指標が発表されるも、結果はまちまち。一方、断続的な円売りは続き、148円台半ばまで値を上げる展開。5日は米8月雇用統計の軟調な結果を受けたドル売りにより、一時146円台後半まで下落。ただ、ある程度織り込みが進んでいたこともあってか勢いは続かず、147円台半ばまで値を戻し、147.41円で越週した。

5日(金)に発表された米8月雇用統計の結果を受け、週初からの上昇分をすべて吐き出す結果に。特に雇用者数については、ここ数か月低調な結果が続いており、9日(火)に発表予定の雇用統計の年次ベンチマーク改定の速報値でも、雇用者数が相応の幅で削減されることへの蓋然性が高まっている。11日(木)には米8月CPIの発表も予定されるが、先月のジャクソンホールでのパウエルFRB議長の発言以降、市場の注目が雇用の動向に集まっている状況下、ドル売りの流れを打ち返すほどの影響度があるとは思えない。雇用環境の悪化を背景とした利下げ期待により、ドルが売られやすい地合いは続くと考えている。一方、本邦では、週末に石破首相が急遽辞任の意思を表明。織り込みが進んでいる米国の利下げに比して、自民党内での意思確認を経て、前倒し総裁選実施とまだ相応に時間がかかると言われていた日本の政局が動きを見せたことの方が、市場に与えるインパクトは大きいと思われる。選挙日程や後任候補の動向をにらみながらではあるものの、かねてより懸念されていた財政拡張や本格的な政局不安を背景に、しばらくは円が売られやすい展開を予想。米国の利下げを目前に控え、一辺倒の上昇とまではいかないまでも、ドル/円は底堅さを維持し、今週はじり高推移になることを予想する。

(3)先週までの相場の推移

先週(9/1~9/5)の値動き:

安値 146.79 円 高値 149.13 円 終値 147.41 円



(資料)ブルームバーグ

2. ユーロ

国際為替部 為替営業第一チーム 尾身 友花

(1) 今週の予想レンジ: 1.1600 ~ 1.1800 171.00 ~ 174.00 円

(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週のユーロ/ドルは、週半ばにかけ下落したが、週後半にかけて持ち直した。週初1日、1.1690でオープンしたユーロ/ドルはドル売りの流れが支援材料になり、1.17台前半を中心にじり高推移した。2日、ユーロ/ドルは軟調な米経済指標が好感され買い戻される場面もあったが、米金利上昇が重みしになる中で1.16台前半に下落した。3日、ユーロ/ドルは米金利続伸が嫌気されて一時週安値となる1.1609まで続落後、米7月JOLT求人件数の軟調な結果が好感されると、米金利低下に連れて1.16台後半に水準を切り上げた。4日、ユーロ/ドルは、独金利低下に加え、米雇用統計公表を前にしたドルの買い戻しの流れを受けて、1.16台半ばでじり安推移した。週末5日のユーロ/ドルは底堅く推移した。NY時間に発表された米8月雇用統計の結果が予想を下回ったことを受けてドル安が進行し、ユーロ/ドルは一時週高値となる1.1759まで上昇。終盤は1.17台前半まで小緩んで引けた。

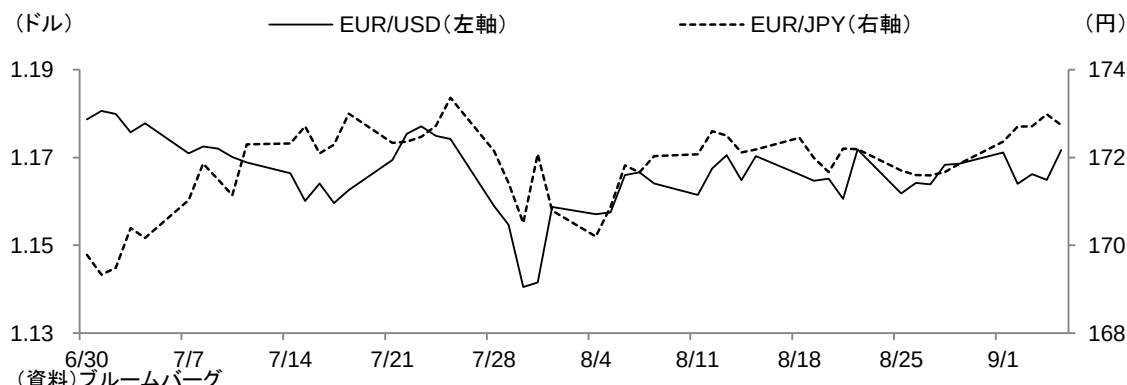
今週のユーロ相場は底堅い値動きを予想する。今週は11日(木)にECB政策理事会が予定されており、政策金利の据え置きが予想されている。前回の7月ECB政策理事会では8会合ぶりに政策金利の据え置きを決定しており、8月28日に公表された議事要旨を確認すると、インフレのリスクが概ね上下にバランスしていることや、域内経済の底堅さが見通しに沿ったものであることが強調されており、ECBの利下げは終了したとの見方が優勢となっている。一方、米国では労働市場の減速を受けて利下げ観測が強まっており、金融政策の方向性の違いからユーロは対ドルで堅調な推移となりそうだ。また、9月ECB政策理事会ではスタフ経済見通しが更新される。6月見通しでは米通商政策の強弱によって複数のシナリオが併記されていたが、米・EU通商交渉もECBの想定内の範囲でまとまっており、履行に関しては不確実性が伴うものの現状ではサプライズもなさそうか。その他、今週は9日(火)仏7月鉱工業生産、10日(水)伊7月鉱工業生産、12日(金)独8月CPI、仏8月CPIの発表が予定されている。いずれも注目経済指標ではないが、欧州域内の経済状況やインフレ動向が伺える貴重な機会のため、ECB見通しに沿った内容であるかひとつひとつ確認したい。対円では、170円台前半でのみ合いが継続すると考えている。今後ECBの利下げ終了の見込みが本格的となれば、一時的に対円でユーロ買いが進行する可能性もあるが、なかなか進まないものの日銀は利上げサイクルにあるため、対円でのユーロ高は限定的か。また、週末は米8月雇用統計の結果を受けてユーロ売り円買いが優勢となり一時173円台前半から172円半ばまで下落したが、週末の石破首相の辞任を受けて週初は円売りが進行しそう。ユーロ/円の下落も一服しそうだ。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/1~9/5)の値動き:

(対ドル) 安値 1.1609 高値 1.1759 終値 1.1722

(対円) 安値 172.00 高値 173.35 終値 172.75



3. 英ポンド

欧州資金部 神田 史彦

(1) 今週の予想レンジ: 1.3300 ~ 1.3700 196.00 ~ 201.00 円

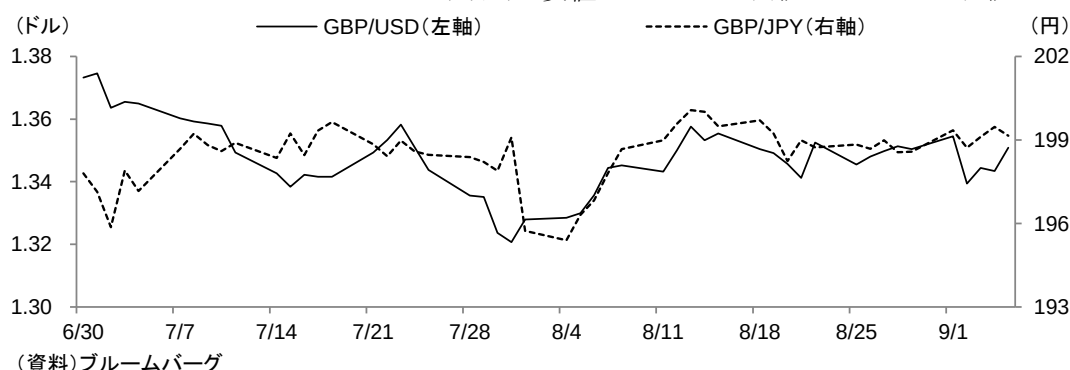
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の英ポンド相場は上値重いながら堅調推移継続。週初1日は1.35台で始まる。英8月製造業PMIの改定値が予想を下回るも影響なし。米国休日の中、先週末のユーロ/ポンドの巻き戻しか英ポンドは若干の強含み。2日は朝方英30年債金利が1998年以来の水準まで上昇したのを嫌気し1.33台へ急落。午後に米8月ISM製造業指数が予想を下回り1.34台を一時回復。3日も高金利が続き1.34が重い立ち上がりだったが、金利上昇に一服感も出て1.34台へ反発。4日も金利上昇一服が続く小康。週末5日は、米8月雇用統計の弱い結果にドル売りとなり1.35台を回復した。英ポンドは対円で方向感ない展開。1日に198円台後半で始まると対ドル、ユーロで強含む英ポンドに連れて199円台半ばへ。2日は円安で一時200円台をつけるも、英ポンドの下落につれて198円台に急落。3日は英ポンド反発につれて199円台を回復し4日ももみ合いながら若干の上昇。5日は、米8月雇用統計で振れたものの199円台での推移に終始した。

今週の英ポンド相場は、上値重いながら堅調推移継続を見込む。英経済指標面では12日(金)に英7月の単月GDPや鉱工業生産などが発表となる。英中銀の政策決定が翌週に控える中で、影響は限定的と見られている。また、先週2日は、世界的な超長期債売り環境の中であつたが、再び英30年金利の上昇がスポットを浴びた。一方で同日英10年国債の売り出しがあつたが、高利回りを背景に絶好調だった模様(過去最高の140億ポンド調達との報道)で、オランダ年金改革にかかるユーロ債懸念もあつて英国債に需要が流れたのか、市場参加者のリスク選好が測りにくいのも事実。さらに同日、英政府は、もともと10月末に予定されていた秋季予算の発表を11月後半へ延期すると決定した(11月26日と12月3日に発表)。なお、11日(木)から英中銀の政策決定者は翌週の委員会前のブラックアウト期間に入る。市場ではかかる状況下、量的引き締め(QT)ペースの減速を期待する声が聞かれる。それにより長期金利の上昇圧力がいくらか緩和することが期待されるため。政策金利変更についてはほぼ織り込まれておらず話題にもなっていない。

(3) 先週までの相場の推移

先週(9/1~9/5)の値動き: (対ドル) 安値 1.3334 高値 1.3554 終値 1.3507
(対円) 安値 198.33 高値 200.27 終値 199.15



4. 豪ドル

国際為替部 為替デリバティブチーム 岩下 義明

(1) 今週の予想レンジ: 0.6480 ~ 0.6620 96.50 ~ 98.00 円

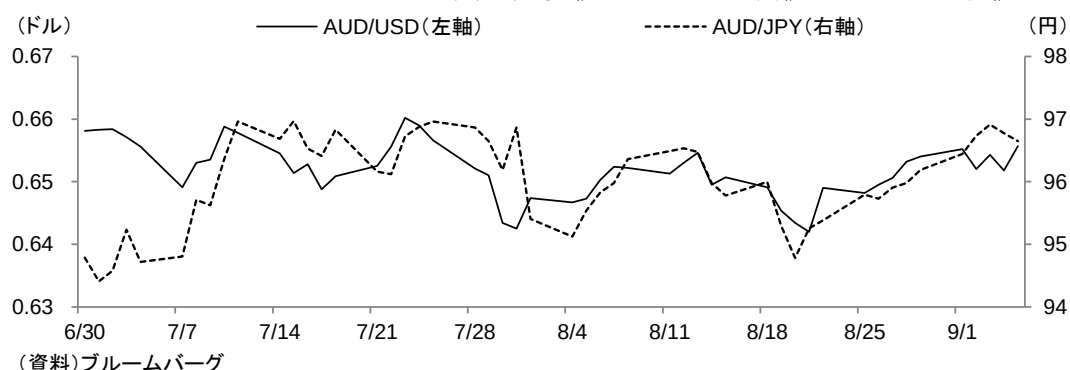
(2) ポイント【先週の回顧と今週の見通し】

先週の豪ドルは一進一退の攻防となった。週初1日、米国休日でマーケットが薄い中、値幅は限定的で0.6550近辺で推移した。2日、ロンドン時間にドル買いが進み豪ドルは急落。その後米国時間でも米金利が上昇し一時週安値の0.6483まで下げ幅を拡大したものの、その後は低調な米経済指標を受けたドル売りとなり米国時間の下げを戻した。3日、豪6~9月GDPが予想対比上振れたことで今月末のRBAにおける金利据え置き期待が高まったものの、為替の反応は限定的。米国時間の予想を下回る米7月JOLT求人件数によりドル安となり豪ドルは上昇。4日、翌日に米8月雇用統計を控え指数への反応は限定的ながら、ドルが底堅く推移し豪ドルは下落した。5日、アジア時間から本日発表の米雇用統計の下振れリスクが警戒されてかドル売り基調となり豪ドルは上昇。肝心の米8月雇用統計は雇用者数変化が予想を大幅に下回ったことに加え、失業率も上昇、6月の結果の二度目の下方修正など弱いが出たことにより一気にドルが売られ一時0.6588まで上昇。その後はやや戻したものの、高値圏の0.6555で越週。

今週の豪ドルは底堅い展開を予想。今週は9日(火)に豪9月ウェストパック消費者信頼感、10日(水)に米8月PPI、11日(木)に米8月CPI、12日(金)に米9月ミシガン大学消費者マインドの発表が控えている。次回RBAが今月末にあるものの、翌週にFOMCを控えており、豪ドルよりはドル主導で相場が動く展開を想定。一番の注目点は11日の米8月CPIであるが、現状翌週のFOMCで1回利下げが完全に織り込まれている以上、仮に弱い数字で▲50bp(2回分)利下げを催促するような形になり、豪ドルの急騰となる可能性には注意しておきたい。特にブラックアウト期間である以上中銀のスタンスをうかがい知ることが難しく、急激な値動きとなることも考えられる。仮に堅調な数字が出たところで利下げが延期になるとは考えにくく、豪ドルの下落幅は限定的か。基本的に材料待ちの部分が大きく、ポジションを積み動きも限定的であり明確なトレンドが出ないまま0.6550近辺を中心としたレンジ相場になるだろう。

(3) 先週末までの相場の推移

先週(9/1~9/5)の値動き: (対ドル) 安値 0.6483 高値 0.6588 終値 0.6555
(対円) 安値 96.06 高値 97.30 終値 96.65



当資料は情報提供のみを目的として作成したものであり、特定の取引の勧誘を目的としたものではありません。当資料は信頼できると判断した情報に基づいて作成されていますが、その正確性、確実性を保証するものではありません。ここに記載された内容は事前連絡なしに変更されることもあります。投資に関する最終決定は、お客様ご自身の判断でなさるようお願い申し上げます。また、当資料の著作権はみずほ銀行に属し、その目的を問わず無断で引用または複製することを禁じます。なお、当行は本情報を無償でのみ提供しております。当行からの無償の情報提供を望まれない場合、配信停止を希望する旨をお申し出ください。